資　料

フランスの獣医大学と大学制度

早崎峯夫*

フランスの獣医大学は，パリ（アルフォール），南東部のリヨン，南西部のトゥールーズ，西部のブリュターニュ半島の付け根にあるナントの各都市に4校しかなく，すべて国立大学であるが，日本と異なり農務省が管轄している．各校の1学年の学生数はおおむね100名ほどで，教育年限は4年間である．

フランスの獣医大学の受験制度，教育内容，教育組織については既報〔笹本，藤本(1984)：日獣会誌，37(3)，172～177〕にもあるが，昨年，学位制度も変更したので改めて紹介する．

フランスでは，一般的には，大学入学を希望する学生は，必ず国が一律に実施するバカロレア (Baccalauréat) と呼ぶ大学入学資格試験をパスしなくてはならない．バカロレアは，リセ（日本の高校に相当）を卒業した段階で受けられ，この時学生の平均年齢は 17 才で，通常飛び級や落第により 16～18 才の間にあるが，原則として受験に年齢制限はない．バカロレアをパスすると，通常1～2年間，あるいはそれ以上，獣医大学入学準備課程 (Preparation au Concours) での教育を受けねばならない．この課程は，各地方の限られたリセにのみ併設されていて，指定されたリセに入らなければならない．こののち，全国一律で行われる国立獣医大学入学試験 (Concours d'Entrée Ecole Nationale Vétérinaire) を受けることができる．

入学試験は難しく競争率が高いため，例年3,000人位が受験して450名くらいしか合格しない．合格後4つの学校に振り分けられてゆく．外国人も定められた入学資格を満たし，書類審査をパスすれば入学できるようになっている．初めの2年間は基礎教育で，あとの2年間は臨床・応用教育が行われる．実態として，日本同様，入学は難しいが，卒業は易しいという．卒業の段階で，学生は平均 23～24 才に達している．日本のような獣医師国家試験はなく，獣医師の称号を得るためには，研究論文をそれぞれの4都市の，いわゆる地元の大学の医学部か薬学部に提出しなくてはならない．これは獣医大学に博士課程が置かれていないからである．論文作成に通常卒後1年間をかけ，こうして論文審査にパスすると獣医学博士 (Docteur Vétérinaire) の称号と国家免状（獣医師免許証に相当）が授与されるが，この学位記をもって獣医師と認定されるのである．

この獣医学博士の学位は，フランスの文部省管轄の大学における第3期博士に相当する（笹本ら論文参照）ものであるが，日本の博士号レベルほどではなく，修士号レベルに近いもので，論文の内容も文献調査的研究といった比較的易しいものである．しかし，フランスには兵役制度があり，獣医学卒業後，多くの学生は1年間の兵役を受けるので，獣医学博士の学位記を授与される時には通常，25～26 才に達している場合が多い．

獣医大学の教官組織は次のようになっている．

正教授 (Professeur titulaire)：選考試験を経て就任．

準または無席教授〔Professeur non titulaire (sans chaise)〕：講座をもたない．日本の助教授に相当．

講師 (Maître de Conférences)：教授適格者リストに登録された者．

有資格助手 (Maître–Assistant)：選考試験を経て就任．

助手 (Assistant)

助手は，教授の推薦により，教授会の同意を経て，1年間の任期で就任でき，任期延長は2回（3年間）までできる．この間に，試験を受け，パスすると有資格助手となり，通常2年間の見習い期間（この時期は，Maître-Assistant stagiaire と呼ばれる）を経て，正有資格助手 (Maître–Assistant titulaire) となる．これ以後，講師以上に昇格していくためには，国が行う国立獣医大学の1級教員（教授）資格試験 (Agrégation) をパスしなければならない．この試験は極めて難しく，この段階で，通常，5～6年を要する．1級教員資格試験は以前は3年に1回であったが，今は2年に1回行われる．試験内容は教員適性検査と研究者適性検査よりなっている．

この試験にパスすると教授資格保有助手 (Maître–Assistant agrégé) となり，講師への応募資格ができる．ただし，講師，準教授，正教授は，教員ポストに空席が生じた時のみ募集される．応募者は専門分野での資格と業績により，それぞれの大学の選考委員会で判定されて採用される．正教授だけは選考試験をパスして就任する．空席ポストへの応募はどの大学の教官でもできるが，4校しかないため，狭き門となっている．

また，教授の停年は一応決まっているが，実際には慣習として教授が働きたいと思い，その任務を確実に果たしている限り，かなり高齢まで就任できる．

フランスの一般の大学制度と学位制度，つまり，文部省管轄の制度は，バカロレア試験を経て総合大学 (Uni-

* 東京農工大学農学部（東京都府中市幸町3-5-8）

versité) に入った場合，2年間の第1期を終了すると同じく2年間の第2期に進むことができる．第2期を1年間で卒業を望む学生には学士号 (Licence) が授与され，2年間の所定の教育を終了すると修士号 (Maîtrise) が授与されるのである．ただし，日本の修士号よりも求められるレベルは低い．修士号を得るとさらに2年間の第3期に進学でき，一定の研究成果をあげ論文にまとめると第3期博士という博士号が授与される．第3期博士号は，2年間の制限にこだわらないもので，1年間で立派な成果がまとまれば授与され，2年でまとまらない場合や本人がさらに研究の継続を望めば，就学の延長が可能である．ただし，第3期博士号は日本の博士号 (Ph D) より，求められる研究レベルの下限は低いものであることは前述した．フランスにおける最も高位の学位は，国家博士号 (Doctorat és-Sciences d'Etat) と呼ぶもので，昔は高齢に達し，功成り名を遂げた者が授与される名誉称号的性格のものだったそうだが，近年では10年以上の研究歴を経たのち，世界的レベルでの研究業績をあげた者に対して授与される．この称号は，Ph D 学位の研究レベルよりはるかに高いものである．

世界が，Ph D 学位のレベルを博士号の一般的レベルとして制度化している現在，フランスにおける第3期博士は Ph D 学位より低く，博士と名乗れるものではなく，国家博士は容易に得られないことから，国際的基準に見合った学位制度へと見直す作業が進められてきた．

その結果，この2段階の学位制度は廃止され，1985年から両者を一本化した，Ph D 博士号に相当する博士号 (Thése de Doctorat) が制度化された．したがって，大学年限も変わり，初めの2年間を終了すると教養課程終了証，あるいは学士号が授与され，次の1年間で修士号が授与される．さらに，次の1年間（4年目）で高等課程終了証 (Diploma d'Etudes Approfondies, DEA) が授与され，こののち博士課程に入り，2～4年間の研究生活ののち，論文を提出して Thése de Doctorat が授与されることになる．

このような教育体制の見直しは，教員組織についても検討されはじめていて，助手から正教授までの複雑な昇任制度では，教官が選考試験のための勉強に追われ，十分な研究あるいは長期展望に立った研究ができないという反省が出始めている．近い将来，フランスの教員構成，選考方法も変わっていくものと思われる．

1. 国立アルフォール獣医大学 (Ecole Nationale Vétérinaire d'Alfort)

1766年創立以来，今年で220年の歴史をもち，後述のリヨン獣医大学に次いで古い獣医大学である．1967年，同校は，ソルボンヌ大学大講堂で，内外の学界人を集め盛大な創立200年記念祭を催した．同校の創設者クロード・ブルジェラ (Claude Bourgelat) は，時の権力者ルイ15世の馬術教師であるとともに，リヨン・アカデミーの会長で，大百科辞典の編さん協力者であったが，王に獣医学教育の重要性を説き，1762年リヨンに世界で初めての獣医学校（王立）が設立された．その後ルイ15世は，彼に2番目の王立獣医学校の設立を命じ，1765年冬，パリ市内の Chapeille 通り（パリ・北駅の北東，数百メートル）に敷地を得て教育が開始されたが，敷地は狭く，飼料代やパリ市入場税の高いことなどのため，1766年，パリ南東部郊外の，マルヌ川とセーヌ川の合流点に獣医学校が改めて創設された．この敷地の近所には，公爵の住むアルフォール城があり，この名を学校の名にもらった．本校の開設にあたり，ブルジェラは，リヨン獣医学校から臨床学者，解剖学者，優秀な学生らを呼び寄せ，1766年10月より授業が始まった．創立15年後，農業経済学を講義する，動物自然史と獣医地方経済学講座が新設され，アルフォール獣医学校は，フランス初の農業学校ともなった．この講座は，1826年には国立グリニョン農業経済学校へと発展・独立して，同校は再び獣医学教育専門の学校に戻り，獣医学の研究の進展により，学問体系の基礎が確立していった．以後，同校より多くの偉大な獣医学者が輩出されていくのであった．

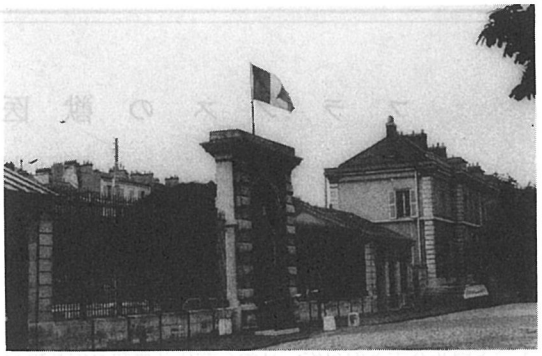

写真1　国立アルフォール獣医大学の正門と校舎

この時代は，ルイ・パストゥールの研究活動の時代と時期を同じくしていて，彼が次々と新しい学説や新知見を旺盛に発表していた頃，とくに有名な自然発生説論争の時には，同校微生物学者ブーレイ (Bouley) は彼の有力な支持者であり，逆に同ショボ (Chauveau) は研究上の好適手であった．この時期にルイ・パストゥールは，獣医学の幅広い応用性に注目するとともに獣医学者の力を高く評価するようになった．パストゥールは，ブーレイ宛の手紙にこう書いている．「もし，私が若かったならば，また年のわりにもっと壮健だったならば，私はアルフォール獣医学校の学生になっていただろう．獣医学の知識が私に情熱の火をつけてくれた」と．以後，彼の研究の推進に多くのアルフォール獣医学校出身の獣

医学者を起用したのだった．中でも，世界的に著名な研究者は，炭疽ワクチン開発の研究で重要な役割を果たしたノカール (NOCARD)，BCG ワクチンの開発者の1人であるゲラン (GUÉRIN)，ジフテリアと破傷風の菌体外毒素を発見し，アナトキシンによるワクチンを開発したラモン (RAMON) がいる．ラモンは，のちにパストゥール研の第5代所長を勤めた人である．

今日のアルフォール獣医大学は，次の4項目を獣医学の重要な使命として掲げ，獣医学の発展に寄与している〔ピレ (PILET) 前学長〕．

それは，① 畜産経済発展への寄与，② 食肉など食品衛生，人畜共通感染症の予防，基礎獣医学の研究を通して公衆衛生向上への寄与，③ 家畜衛生への寄与，④ コンパニオン動物の保健管理を介して市民生活の質的向上に寄与することである．

そのための教員組織の充実，質の高い獣医師を生みだすための教育体制，研究の充実を計るため，世界保健機構〔Organisation Mondiale de la Santé, OMS (WHO のこと)〕，国立科学研究センター (CNRS)，国立保健医学研究所 (INSERM)，国立農業研究所 (INRA)，パリ・パストゥール研，大学医学部や理学部，高等農業経済学校と密接な科学協力関係を結んでいる．

〖研 究 活 動〗

① **飼育と家畜生産**：飼料の栄養価，飼料の改良，家兎と野兎の食品利用，突然変異の遺伝学的・応用遺伝学的研究による品種改良．

② **経済動物の疾病**

〔感　染　症〕

牛；子牛の長期放牧における疾患，感染性呼吸器疾患，ブルセラ病の診断，ワクチンの開発，ワクチン製造技術，雌牛の不妊の原因となる感染症（マイコプラズマ症，トリコモナス病，感染性子宮炎），子牛の感染性胃腸炎，反芻獣の代謝病，血液疾患．

豚；感染性胃腸炎の診断法，オーエスキー病の診断法と弱毒ワクチンの開発，豚水胞病の診断・治療．

その他；家兎と放牧場の野兎のサルモネラ症の治療と予防．

〔寄生虫病〕 抗蠕虫剤・抗コクシジウム剤の開発と感染予防，呼吸器真菌症，バベシア症の疫学，円虫症と牛の肝蛭症，寄生虫感染とその治療における病態生理学的研究．

〔腫　　瘍〕 牛白血病のウイルス学的研究および血清学的診断法の研究．

③ **スポーツ動物とコンパニオン動物の疾病**

馬；アデノウイルス症，鼻肺炎，流感，関節炎，鼻ウイルス症，伝染性貧血，骨・関節の整形外科，妊娠診断．

家畜食肉目；眼疾患，腫瘍の病理学的・免疫学的研究ならびに放射線療法，猫のリンパ性白血病とサルコーマ症，サルコーマウイルスの腫瘍原性の研究，シンチグラムによる腫瘍診断法，犬の免疫疾患，犬リーシュマニア症，犬毛包虫症の治療法，猫感染性腹膜炎．

④ **公衆衛生**：食肉中の獣医薬品，飼料添加物の蓄積と毒性，殺虫剤の牛乳への移行，獣医中毒学，飼料管理学，人畜共通感染症（ブルセラ病，結核），鉛・フッ素・無水亜硫酸の環境汚染．

⑤ **解剖・生理・比較病理**：ホルモン性腫瘍の実験モデルとしての乳腺腫瘍，歯の解剖学，器官・脈管の発生学，非特異的免疫刺激剤と免疫治療剤，コラーゲンの病態生理学的研究，新抗生物質の研究，実験動物の血統の研究，新薬合成の研究．

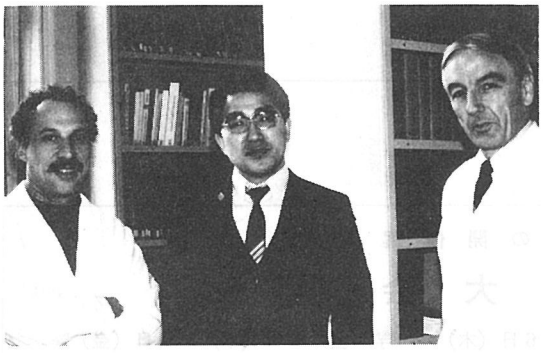

写真2　アルフォール獣医大学寄生虫学教室ブジエラ (J. BUSSIERAS) 教授(右)と，フランスの獣医大学制度の説明をうけたシャルメット(R. CHARMETTE) 博士（左）と著者

2. 国 立 リ ヨ ン 獣 医 大 学
(Ecole Nationale Vétérinaire de Lyon)

世界で一番古くに設立された獣医大学で，1762 年1月1日，ルイ 15 世の馬術教師ブルジェラ（アルフォール獣医大学の項参照）により，国家会議の決定のもとに創設された．その後，時の大蔵大臣と官房長官を歴任したベルタン (BERTIN) は，ルイ 15 世に獣医教育の重要性を説き，1764 年6月3日，同校は王立学校となった．1795 年同校に農業経済学講座が新設され獣医農業経済

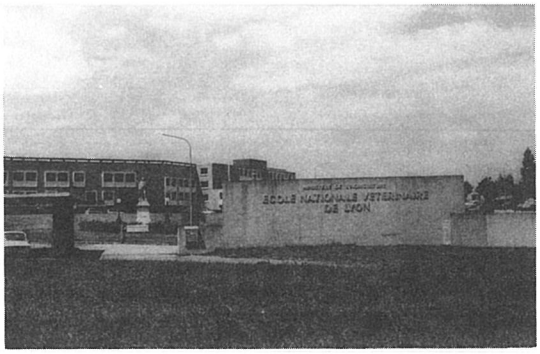

写真3　国立リヨン獣医大学の正門と校舎

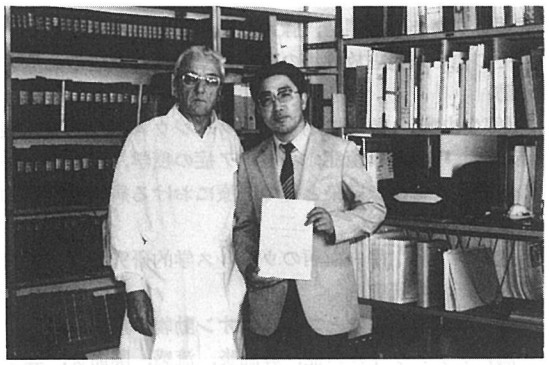

写真4　リヨン獣医大学オセビー（J. EUZÉBY）教授（元世界獣医寄生虫学会会長，現副会長）と著者（同大学創立200年記念出版図書を寄贈された）

学校と改名．1798年にはリヨン市中央部のソーネ川岸に同校は移転し，以後1976年までの178年間，この地にて獣医学教育が続けられた．この間に，国家体制の変遷に伴い，王立から皇帝立，そして国立へと名称も変わった．1977年，それまでの校舎から約20キロ離れた，リヨン市北西部の郊外の丘陵地に広大な土地を得て，パリの一流建築家の設計による新校舎が設立された．

〖研究活動〗

教育組織は15講座よりなる．

⊙薬理学および中毒学講座：競走馬のドーピング，薬物分析・動態・代謝，殺ソ剤，獣医中毒学．

⊙物理学・生物化学・医学講座：臨床内分泌学，薬物最終代謝物の生化学と中毒学．

⊙家畜解剖学講座：神経・循環器の比較解剖，哺乳類の胚と胎子の発育．

⊙生理学・治療学および薬物動態学講座：ルーメン内発酵，非蛋白体窒素の摂取と代謝．

⊙衛生学および畜産物製造学講座：畜産製造物の品質管理と感染病原体の食品混入．

⊙寄生虫学および寄生虫病学講座（写真4）：反芻獣の蠕虫，中間宿主の生物学的コントロール，魚類と野生反芻獣の蠕虫，駆虫薬．

⊙症候学および単蹄目および食肉目動物の病理，獣医法規講座：人と家畜のインフルエンザの疫学，放牧地適性，免疫病理学，血液学．

⊙哺乳類家畜および家禽病理学講座：畜産物製造工場の廃棄物の有害性，新生子の病理学．

⊙外科病理学講座：麻酔学，蘇生術，輸血，輸液，骨・関節疾患，皮膚移植．

⊙繁殖病理学講座：臨床内分泌学，動物園動物と野生動物の生殖生化学．

⊙伝染病・人畜共通病および衛生法規講座：野兎病，粘液腫病，リケッチャ症，真菌病，オーエスキー病，狂犬病の疫学的研究．

⊙一般病理学・微生物学・免疫学講座：微生物生態学，緬羊の細胞性免疫，野生動物の衛生管理．

⊙血統学・畜産学・農業経済学講座：品種改良の遺伝学的研究．

⊙飼料学および栄養学講座：単蹄類，放牧牛の飼料と栄養摂取．

⊙組織学および発生学講座：高山動物の繁殖器官の組織学．

このほか，家畜病院をもち，往診車による救急医療活動も行っている．

1962年3月25～27日，リヨン獣医大学は創立200年記念祭を盛大に祝った．この記念祭には，フランス全国の学界関係者ら多数の著名人が招かれ，さらに世界35カ国から各国の獣医界を代表する研究者，獣医師会会長らが式典に参列，あるいは祝辞を寄せるなど，全世界の獣医界がこの世界最古で，数々の輝しい学問的業績を築きあげて，今日なお獣医学の進歩に重要な役割を果たしている同校の創立記念祭を祝った．この式典の詳細は，200年記念出版物となって記録されていて，わが国からも日本獣医学会を代表して，故大越伸東京大学教授の祝辞が載せられている．

//////地区大会・学会の開催案内//////

中国地区の大会・学会

日　時：昭和61年11月6・7日　大会；6日（木）　学会；6日（木）・7日（金）

場　所：山口グランドホテル〔山口県吉敷郡小郡町（新幹線駅前）　TEL 08397-2-7777〕

担　当：山口県獣医師会〔吉敷郡小郡町下郷東蔵敷1080-3　TEL 08397-2-1174〕